時のデバッカー

上城素人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
時のデバッカー

【Ｎコード】
Ｎ１１２０Ｚ

【作者名】
上城素人

【あらすじ】
世界を一変させる発明が世の中にはありますよね？
この話は、そんな世界を変える機械が発展した少し未来の日本から、一人のエンジニアが文明の違う世界に旅立ってしまったら？どんな事になるんだろう。と考えて書いています。
皆さんには『自分だったらどうするだろう？』と考えれもらえるお話に出来るようにコツコツ頑張っていこうと思います。

奏魔のクリスマスイブ（前書き）

このお話はフィクションであり、実在する団体、作品、人物とは一切関係ありません

奏魔のクリスマスイブ

世界を変える発明・発見という物が世の中にはある。
例えば、火の使用。
言葉すら持たなかった時代、我々の祖先は外敵に怯えながら眠り、夜を過ごした。
しかし、火の使用により彼らの生活は一変する。
外敵である狼や虎は、火を恐れ彼らの寝床に近づかなくなった。
更に、寒さに耐える必要も無くなった。
この瞬間が我々人類にとって、最初の世界の変化だった。
そして、人々は変化を求めるようになった。
より住み良い世界を求め、より安全な世界を求め、より快適な世界を求め、人々は手を取り合い、時に手に持つ刃で互いを傷つけつつ世界を変えていった。
その中で沢山の世界を変える物が生まれた。
言葉、紙、ヒッタイト鉄、剣、法、神話……
古い物から並べていっても、現代でも人々の生活に息づいている物ばかりだ。
最近では、エンジン、自動車、飛行機、テレビ、原子力……
それらは全て、より高度な技術と知識を必要とし、世界中のエンジニアと科学者の英知の結晶であった。
これらの世界を変える物たちは、人々の歴史に華やかな彩りと深い傷を残しながらそこに君臨し続ける。おそらく、世界をリセットしても、これらの物はそこに君臨し続ける。
そんな、世界を変えた物の参列に新たな物が加えられようとしている。
それは、体内常駐型ナノマシン『メイガス』だ。
『メイガス』が発表された２０３２年の時点で人間の体内にナノマシンを入れて病気の治療や健康維持を行う事は至って普通で、こ

のナノマシンが発表された当初、一般の人々の認識は「また、新しいナノマシンが出たのかー」程度であった。
『メイガス』が人々の度肝を抜いたのは販売が始まってから6カ月後、２０３２年１２月２４日、クリスマスイブの事である。
『メイガス』の販売元である『新田製作所』の技術研究所のメンバー１３人が、池袋の西口公園をジャックした。正しく説明するならば、彼らを乗せた移動式のステージが西口公園前の公道を占拠した。
コレだけでも翌日の新聞の一角程度は賑わせそうではある。
突然、西口公園に乗り付けた移動式ステージに立っていたのは白衣の男女だった。
どちらも２０代前半の若手社員で、二人とも美麗な顔に緊張を貼付け、ステージの上で膝を震わせていた。
この震えが、突然４０人以上のカップルの前に放り出されて緊張しているからなのか、スーツの上から白衣を羽織っただけの格好なので１２月の寒さに耐えきれなかったからなのかは本人たち以外は知る由もない。
そんな男女は衆目の視線を浴びながら、無言でステージ上で背中合わせになると、中央から両サイドへ分かれてゆく。男性は左へ。女性は右へ。
１歩。
同じタイミングで足跡が響く。
２歩。
道行く人々も足を止め、男女の行方を目で追った。
３歩。
西部劇のガンマンが決闘するように、男女が相手の方を振り向き、それぞれが両手の手を前に突き出す。
次の瞬間、世界が変わった。
男性の手から炸裂音と共に蒼い雷撃が、女性の手のひらから煌煌と輝く火球がステージの中央に向かって奔る。

交錯する雷撃と火球。轟音を響かせ、白い光の固まりが生まれた。
一拍の後、光の固まりは消えて、静寂が西口公園を包む。
人々は、目の前で起こった事が余りにも非現実的だった為か、口をあんぐりと開けて惚けている。
惚ける人々を尻目に、男女はステージの外に向かってを走り出した。
それぞれの足がステージの淵を捉え、踏み込み、そしてステージの外に飛び出した。
男女が踏み込んだ足が溜め込んだ運動エネルギーは『跳ぶ』為には使われなかった。
男女が足の裏からステージに送り出した力のベクトルは、重力に引かれて放物線を描く事無く、斜め上を向き続けた。
男女は文字通り『飛』んでいた。
重力の枷を感じさせない滑らかな飛行で人々の頭上を飛び越える。
ここで初めて歓声が沸いた。人々の理解が少しづつ現実に追いついてきたのだ。自分達が『魔法』を見て居るのだと、未知の技術目撃者であると気づいたのだろう。
歓声の波を従えながら男女は空を自由に疾走する。
男女が西口公園を一周したその時、移動式ステージから音楽が流れる。
エレクトリカルパレードの軽快なリズムに合わせて、男女の手から色取り取りの光の玉が放たれる。光の玉はクリスマスイブらしく空をイルミネーションで飾り、クリスマスツリーやハート型、『Ｍｅｒｒｙ　Ｃｈｒｉｓｔｍａｓ』の文字等、様々なモノを描き出した。
音楽の停止とともにそれらが全て消え、これまで以上の歓声が起こった。
「皆さん、我々の演出は楽しんでいただけたでしょうか？」
突然の呼びかけであった。
空を見上げていた人々が声のする方、ステージの壇上を見ると、

一人の痩身の老人が立っていた。
サンタクロースの格好をした老人は、にこやかな笑みのまま言葉を続けた。
「皆さん、メリークリスマス！……と言うのは少し気が早っかったかも知れませんね。私は新田製作所という会社で社長をしている、新田宗雄（あらた むねお）と言います」
新田老人は会釈し、ニコニコと人々に笑顔を振りまく。
「普段は医療機器とか産業用ロボットなんかを作ってる工場の親父ですが、今日は少しだけオシャレをしてみました。しかし、自分でも似合って無いと感じている次第です。さて、今、皆さんにお見せした不思議な現象は楽しんでもらえましたか？」
「うぉー」とか「イエーイ」とかという歓声と割れんばかりの拍手が老人に浴びせられた。
「一応申し上げておきますが、東京都に許可を取ってやってるので、皆さんはこんな風にトラックなんかを乗り付けるなんて真似はしないで下さいね。……おっと、少し話がそれてしまいました。ここからが私のと言うより弊社の本題なのですが、皆さんが見た不思議な現象の事です。『魔法』だと思った方、『超能力』と思った方、色々いらっしゃると思います。しかし、今我々がお見せしたのは、『魔法』でも『超能力』ありません。洗練された『技術』、テクノロジーの結晶です。信じられないかもしれませんが、先ほどの現象は弊社の社員の体内にあるナノマシン『メイガス』による物です。メイガスの演算能力が現実世界の構造を書き換え、我々の目には魔法にしか見えない現象を起こします。我々はこの技術を『現実干渉』と名付けました？」
人類史的には『奏魔のクリスマスイブ』と呼ばれる事になったこの摩訶不思議な出来事は、翌日の朝刊全ての一面を飾り、世界を震撼させた。
人類に取って新たな時代の到来であった

奏魔のクリスマスイブ（後書き）

こんにちは、上城素人（かみしろ しろと）です。
初投稿なので、色々とサイトの使い方が良く分かっていません（笑）
この後アップできたら自分でも確認してみて、変な所があったら修正してみようと思います。
閑話休題
さて、本編ですが、まだ全然書けてません。自分を追い込んで自転車操業的にしないと書ききれない気がしたので、とりあえずアップしました。
週に一回ぐらいのペースでアップできるように頑張っていこうと思います。
序章の序章であらすじにも到達してませんが、ぼんやりと見守っていただけるとありがたいです。

また、誤植のご指摘やアドバイスなど頂けると嬉しいです。

森の逃亡者（前書き）

この作品はフィクションであり、実際の団体、人物、などなど、には一切関係ありません。

森の逃亡者

「ここは、何処だぁぁぁぁぁ！」

濃い緑色の針葉樹が生い茂る森の中、朝もやを引き裂くように男の叫び声が木霊する。

声に驚いたのか数羽の鳥が羽を休めてた木から飛び立った。

声のした方から、タッタッタと走る足音。

声の主、壬生アスヒトは白い息を吐きながら、走っていた。

地面は少しぬかるんでいて、アスヒトが足を一歩踏み出すたびに泥が飛び跳ねる。

飛び散った泥は、アスヒトが履いている薄いブラウンのチノパンとアディダスのスニーカーに付着し、斑模様を作っていた。

チノパンの尻の部分には泥の汚れ以外に濃い青汁を擦り付けた様なシミもある。先ほどコケの生えた岩に足をすくわれ、盛大に尻餅をついた時に着いた物だ。

満身創痍で走るアスヒト。学生時代は野球で『高機動型センター』を自称するほど自慢だった脚力も、今となっては見る影も無く。社会人になってからの４年間、全く運動してこなかったのが祟って既に膝が笑っている。

アスヒトの走力をサポートして来た肺活量も、過去の栄光を忘れたように衰えてアスヒトは既に肩で息をしている。

体力的な限界が今にも来そうなアスヒトであったが、足を止める事は無かった。

彼の顔には恐怖と混乱が渦巻いており、切羽詰まる物を感じさせる。

走り続けながら、アスヒトは後ろを返り見る。アスヒトの視線の先から、大地に岩を叩き付けるような轟音と太く猛々しい獣の唸り声が響く。

「ハァ。ハァ。どこまで…ケホッ……着いて来るんだ……ハァ、ハ

ァ」
枯れた喉に酸素を無理矢理送り込みながら、アスヒトは悪態をつく。
『ブフォォォォォォォォォォウ！！』
朝霧を切り裂いて飛び出してきたのは巨大なイノシシ。前を見つめる両眼は怒りに染まり、赤く血走っている。大きく開かれた口から伸びる二本の牙は、太く鋭い。人間一人を易々と串刺しに出来そうだ。
その姿を見たとき、アスヒトは走る速度を上げた。
しかし、イノシシも見つけた獲物を逃がすまいと食らいつき、アスヒトの走っている道を完璧にトレースしながら、巨大なイノシシが迫り来る。
入組んだ天然の迷路を右へ、左へと奔走する。
アスヒトの足跡を辿るように、体に苔を生やした大イノシシは邪魔な木々をなぎ倒しながら、距離をジリジリと縮めてくる。
大イノシシの巨大な蹄が地面を捉える度に、コンクリートを大きなハンマーで砕く時の様な音と、震度2ぐらいの揺れが到達する。
大イノシシの走った後には、小学生一人分くらいがすっぽり収まる窪みが出来ている。
あんなのに踏み潰されたら、多分ミンチにすらして貰えない。
アスヒトは走りながら手に持った多目的携帯端末・ＭＰＤＳを操作する。もしもの時の為に、ＭＰＤＳの連絡先リストの中に登録しておいた地元警察の番号を呼び出して、通話のマークをタッチ、ＭＰＤＳを耳に押当てる。
『ツー。ツー・ツー』
さっきからコレばっかりだ。
森の中をどこまで走っても、ＭＰＤＳは電波をとらえる事が出来ない。
『世界中どこでも通話可能』を謳い文句にしていたプロバイダの端末なのに、通話不可能地域がこんな所にある。こういう危機的状

況でこそ、真価を発揮するべき通信手段なのに全くもって役に立たない。
「ハァ……ハァ……、このままじゃ追いつかれる……。こうなったら、あんまり使いたくは無かったけど」
アスヒトは走りながら、右手に握ったＭＰＤＳを操作する。
「どこに格納したっけ……早く見つけないと……ハァ……確か……ファイル名は……ケホッ……なんだったっけ？『霹靂（ヴォルテックス）』だったけ？」
端末の有機ＥＬディスプレイには検索中の文字が踊る。
アスヒトは祈るような気持ちで端末を握りしめながら、木の根を飛び越え、木の幹を迂回し、化け物のようなイノシシから逃げる。
アスヒトの耳に鈴を鳴らしたような音が聞こえてきた。
男は画面を一瞥するや否や端末の画面を数度タップすると、再び端末を握りしめた。
画面上には「『霹靂（ヴォルテックス）・ｍ』インストール中」という文字と一緒に、インストールの状況を知らせる数字が並ぶ。
１０％……２０％……と、着実に進行していくインストールと同じように、アスヒトとイノシシの化け物との距離も着実に縮まっていた。
荒く猛るイノシシの呼吸がアスヒトの髪を揺らす。既にイノシシの牙は男を貫く事が出来る位置に着いていた。インストールが終わるのが先か、イノシシが短気を起こすのが先か、一瞬の差がアスヒトの命運を分ける。
懇願するように端末の画面を凝視する。
８０％……８５％……９０％……インストールの完了は目前だった。
「ハァ……なっ、なんとか……間に合いそう？？」
『ブフォォォォッグゥゥゥゥ！！』
アスヒトの安堵を引き裂くように、怒りに燃える獣の声が響いた。
イノシシがその顎を引き、串刺しにする予備動作に入る。
画面に写る数字は９５％。……間に合わなかった。

勢い良く振り上げられる大イノシシの牙が男の背に迫る。
大イノシシの牙が男の背に浅く食い込んだ。
アスヒトには時が止まったように思えた。
走馬灯というものだろうか、脳内に様々な思い出が過る。
子供の頃の楽しい思い出と淡い恋の記憶。
甲子園を目指し野球に明け暮れた高校時代。
馬鹿みたいに笑い続けていた大学生活。
初めて大きな仕事を任されたときの喜び。
男自身の一生が、２６年間の思い出が、洪水のように脳内を巡り、そして、消えていった。
あぁ。ボクの人生はここで終わるのか……。と、アスヒトが、己の死を覚悟した次の瞬間??
??アスヒトの体は宙を舞った。
アスヒトの背から流れた血が赤い軌跡を描き、空中に奇妙な放物線を描いていく。
宙を舞う男の背には浅く一文字の傷が走っている。大穴は空いていない。
出血が少なかったからだろう、描かれた放物線は細く淡い。
空中で回転するアスヒトを追いかけるようにして、打ち上げ花火が爆ぜる時のような音が森に響いた。
空中で体が半回転していたアスヒトの目に飛び込んできたのは、見えない大金槌かなにかで、殴られたかのように、大きな顔と鋭い牙を歪ませるイノシシの姿であった。
左側から打ち付けられたのであろう外力は、大イノシシの左牙を砕き、下顎を十数センチ右側にスライドさせていた。
なんだ、何がおこっているんだ?
こんな芸当……もしかして、攻性現実干渉か?
男の脳内を様々な憶測が交錯する。
考えがまとまらないまま、3回の空中回転の後に、アスヒトは数秒ぶりの地面と接触した。

が、アスヒトの体に加わった横向きの加速度はあまりにも大きく、地面を二転三転と転がり、１０メートルほど進んだところで、ようやく停止する事が出来た。
男の後方で、大イノシシの巨体が崩れ落ちる地響きが轟く。
しかし、アスヒトはうつ伏せになったまま動かない。
森を静寂が包む。
アスヒトの意識は、深い闇の中に落ちていった。

森の逃亡者（後書き）

こんにちは、シロトです。
昨日に引き続き、二話目を何とかアップできました。
さて、一応この物語のスタート地点です。
やっと、あらすじに少しだけ近づいた！
コレから先が長く険しい道のりですが、頑張っていきます。

誤植とうとうあるかもしれませんので、見つけ次第教えていただけると嬉しいです。よろしくお願いします。

正しい意味で衝撃の出会い（前書き）

この作品はフィクションです。実際の登場人物や団体などとは一切関係ありません。

正しい意味で衝撃の出会い

意識を取り戻し始めたアスヒトが最初に感じたのは強い揺れだった。

振動と言うよりも衝撃に近いその揺れは、取り戻しかけている意識を再び刈り取ろうとしている。

自分に何が起こっているのか確認したいアスヒトであったが、目を開けて周囲の状況を確認しようにも体が言う事は利かず、目を開ける事が出来ない。

周囲の視覚的確認は今の所あきらめておいた方が良さそうだ。と、いささか思いっきりの良すぎる判断を下すと、アスヒトは目を開かないで自分の状況を把握する方法、つまり記憶の確認作業に移った。

細い糸をたぐり寄せるように、アスヒトの思考は自身のシナプス回路を慎重に辿った。

（あっれ、おかしいな……）

困った事になった、と、動かぬ首を心の中でかしげる。

記憶力には結構自信があったのだが、不思議な事に随所で記憶の欠落があったのだ。

『自分は何者』で、『どんな人生』を送り、『どのような会社につとめ』『どんな仕事をしていた』、といった長期的な記憶は完璧なのに対して、なんで『自分が気を失っていたのか』とか『今何処に居るのか』といった短期的な記憶、特に意識を失う直前から訳２時間分の記憶がポッカリと抜け落ちているのだ。

記憶喪失でない事は不幸中の幸いであったが、ここまで記憶が完璧に抜け落ちてる状態で、体が言う事を利かないと言うのは不安を抱かずには居られなかった。

（うわー……もしかして、僕は半分死にかけてるんじゃ無いだろうか……絶賛クモ膜下出血中とかだったらどうしよう……）

アスヒトの脳裏には良く無い想像ばかりが錯綜するばかりであっ

た。
（って、このまま悩んでも何の解決にならないか……）
このまま、ほの暗い感情に突っ走ってもしょうがない。と、頭を切り替えたアスヒトは記憶のかけらを集め始めた。が、今度は考え事柄をする余裕を奪われた。
幸運な事に体の感覚が戻ってきたのだ。ただし、アスヒトが最初に取り戻したのは痛覚だった。
アスヒトに全身からの激痛と鈍痛が襲いかかる。
声に出して痛みを表現しようにも声が出ないアスヒトは、心の中で絶叫した。
（痛い！痛い！イッテーーーー！なに？痛いのは生きてる証拠って言うけど、コレは、生存主張が活発すぎるって！）
全身の関節という関節は本来曲がらない方向に曲げられた後のような鋭い痛みが奔る、背中はすり傷に塩を塗りたくったようにヒリヒリと痛む。
そして、何よりも両頬の痛みがヒドイ。左右の頬が一定のテンポを刻みながら鋭い痛みをアスヒトの身体に刻み付ける。心無しか痛みと同時に頭も揺れている気がする。
右。左。右。左。
交互に首が捻れ、刺すような痛みが奔る。
次に復活したのは嗅覚だった。
森の緑の青々とした香りと土の匂いを濃い色のペンキで塗りつぶすように、濃密な血の匂いがする。時折、風に乗ってきたように甘い香りがアスヒトの鼻孔をくすぐる。何の匂いだろう？と頭を揺らしながら考えているアスヒトに洗ったな感覚が復活する。
聴覚だった。
聞こえて来るのは、森のざわめきと鳥たちのさえずり、そして……
【スパァン！？ースパァン！？ー】
空気を入れた紙袋を叩き割るような音が響く。音に合わせて首が揺れる。

破裂音の間の手のように人の声も聞こえる。若い女性の声だ。
「ちょっと……起きなさいって……言ってるでしょ……。お願いだからぁ……」
心無しか涙ぐんでいるその声には、不安と焦りが色濃く滲んでいた。
しかし、アスヒトには女性を気遣う余裕は無かった。
先ほどから聞こえる破裂音と同調するように、左右の頬が揺れ、痛みがドンドン倍化していくからだ。
（ちょっと……すっごい痛い、ものすごっく……）
「痛いんだってばぁぁぁぁぁぁ！」
許容を越えた痛みに、アスヒトは目を見開いて絶叫していた。絞り出した声は森の中に響く。
「……へ？」
復活した視界に写る現状にアスヒトは間抜けな声しか出せなかった。
それもそのはずである、仰向け寝転がっているアスヒトの腹の上に若い女性が馬乗りになっているのだから。
女性の方も、アスヒトの突然の復活に、目を見開いて驚いている。
よく見てみると彼女はかなりの美人だった。整った目鼻立ちと蒼穹を思われる碧眼が見る者を吸い寄せるような美しさを演出し、少し癖の強い栗毛を肩にかからない程度で切りそろっているので、全体的にボーイッシュなを印象を与える。
薄い緑色のTシャツの上に革の軽鎧をまとい、動きやすさを重視したその格好が彼女の少年っぽさをいっそう際立たせる一方で、出る所は出ていて引っ込むべき所は引っ込んでいるモデルのようなスタイルが彼女の女性らしさを引き立てる。
絶世の美女と言っても過言ではなかった。
アスヒトの人生の中でも、これほどの美人と直接顔を合わせる事は今まで無かったので、間抜けな一言を残して以降、彼女に見とれてしまっていた。

ここで、アスヒトは少し不審な事に気がついた。彼女の右手が肩より上に引き上げられていて、力強く握り込まれているのだ。
どういう事だろうと思って視線を少し下に下げてみると、彼女の左手がアスヒトのシャツの襟首を掴んで引っ張り上げているのが見えた。その先にホットパンツから覗く彼女の健康的な太ももが見えて、眼福だったのは言うまでもない。
話を戻すと、状況だけ見れば彼女とアスヒトの間には、一方的に暴力を振るわれる側とそれに甘んじる側の立ち位置があった。
状況を読み切れなかったアスヒトが、僕が何かしましたか？と、問おうと思い口を開いた瞬間、彼女は動いた。
「よ、よかったぁー。……何度ほっぺた叩いても起きないから……あ、あたし、君を殺しちゃったのかと思っちゃたよぉ」
見開いた碧眼に涙をたっぷりと溜めた彼女は、「うわーん」という泣き声をあげながらアスヒトの身体を抱き寄せた。
「よかった……本当によかったよぉ……」
あまりの急展開に状況を把握しきれていないアスヒトは、されるがままの状態だった。

正しい意味で衝撃の出会い（後書き）

こんにちは、そしてこんばんわ。シロトです。

今週分を何とか投稿できました。

今回は、イノシシから救われた後のアスヒトの目覚めとヒロインの登場です。

（打撃的な意味で）衝撃の出会いになればと思っています。

友達にキャラクターのデザインを描いてもらってたりするのですが、ＵＰの方法が良く分からないです（笑）知ってる人教えて下さい。

さて、寒さも厳しくなるばかりですが、健康に気をつけて頑張りましょう！

引き続き、誤字脱字等のご指摘いただけるとありがたいです＾＾

～コタツの電源コード何処にやったっけ？と考えながら　素人～

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1120z/

時のデバッカー

2011年12月11日21時47分発行